

海からの恵みを未来へ

― 研究から見たこれからの可能性 ―



2月27日、熊本北部漁業協同組合（上田浩次代表理事組合長）は、干潟保全事業の報告会を開催しました。これは、熊本北部漁業協同組合が水産資源の回復を図るため、研究機関と協力して、干潟の改善やアサリ資源を守る取組を実施しているものです。当日は、福岡大学・西日本工業大学・徳島大学から、干潟で調査研究を行う先生方が訪れ、本年度の成果について報告がありました。

報告会後は、課題の解決に向けて意見交換が行われました。

「変わる海に対応する」

資源回復のための環境づくり」

町は、私が子どもの頃、干潟のどこを掘ってもアサリがたくさん採れる豊かな海でした。しかし、最近はアサリが減少し、気象の悪化も重なって、令和2年度からアサリの漁獲ができていません。

漁協は研究機関の先生たちと力を合わせ、懸命に対策に取り組んでまいりました。

そんな中、最新の資源量調査で、昨年度より大幅に多くのアサリが確認されました。これは、これまでの取り組みが実を結んだ成果だと考えています。次年度のアサリ採貝に、大きな期待を寄せています。

アサリは気象の影響を大きく受ける生物です。記録的な豪雨や異常気象により、アサリが死滅する状況を何度も経験してきました。近年、有明海を取り巻く環境は大きく変わり、これまでの対策が通じなくなってきました。だからこそ、現在の状況に合わせた新しい取り組みが重要なのです。

アサリは長洲町の大切な特産物です。今後も研究機関の先生たちと共に、気象の変化に強い、継続的にアサリが漁獲できる環境をつくっていきたくないと考えています。



「干潟再生に伴うアサリの復活」

平成29年7月から福岡大学は長洲町地先干潟において、フルボ酸鉄シリカ資材を用いた干潟の浄化に伴うアサリ漁獲量回復に関する実証研究を継続して行ってきました。

昨年度、成功まであと一歩に迫りましたが、冬場の風波によってアサリの稚貝を含めて流されてしまうという事態となり、非常に難しい局面を迎えました。

しかし、私達の研究グループは、この時の経験を活かして今年度のアサリ生息量の回復にたどり着くことが出来ました。同時に、静岡県浜名湖で行っている研究と同時進行することによって、フルボ酸鉄シリカ資材による改善効果を具体的に把握することが可能となり、今後はアサリ漁獲量の回復に向けての取り組みをより一層速やかに進めていきたいと考えています。今後ともご支援いただけますようお願い申し上げます。

これまでの取組

平成25年6月

アサリ人工種苗放流事業（～令和2年）

平成27年8月

連携・協力に関する協定締結

町・熊本北部漁業協同組合・福岡大学

平成29年3月

地域活性化の推進に向けた包括連携協定締結

町・味の素株式会社九州事業所



同年6月

長洲町干潟保全事業開始

干潟環境の改善と水産資源の回復に関する取組を始める。



同年11月

長洲町海苔養殖支援事業（～平成31年）

平成30年8月

水産振興および干潟再生協議会設立

有明海沿岸市町との連携を開始する。

令和2年7月

豪雨災害の影響によりアサリ資源が壊滅的な被害を受ける。

令和7年12月

包括的な連携事業に関する協定締結

町・熊本北部漁業協同組合・味の素株式会社九州事業所・株式会社大林組・西日本工業大学



西日本工業大学
松下先生

最新技術で干潟を守る
ドローン測量による地盤管理
西日本工業大学では、令和4年度から長洲干潟の広範囲でアサリの生残数を把握する現地調査を継続して実施しています。令和7年度の調査では生残数に回復傾向が見られ、殻長20〜30mm程度の個体が多く確認されたことから、

次年度には一定の漁獲量が期待されます。
また、令和5年度からはドローン測量による干潟地盤高の計測を行うっており、潮流の影響で砂の移動は見られるものの、地盤高に大きな変化は確認されていません。
アサリ資源の回復には、幼生の着底・成長に適した干潟環境の維持が重要であり、粗砂と細砂が混在した底質環境が望ましいです。長洲干潟では流れの影響で粒径の偏りが生じやすいため、トラクターによる攪拌などにより地盤環境を整えることが重要です。
令和7年度は大雨が少なかったことも生残数回復の一因と考えられ、今後は降雨など自然条件の影響を軽減する方策の検討も必要です。

長洲町地先の
アサリ資源を増やすための試み
有明海はかつての豊かさを失いつつあり、これまで多大な恩恵を受けてきた干潟は、「畑」と同じように適切な手入れと維持管理が必要な状態になっています。熊本北部漁業協同組合では、アサリを対象に稚貝放流、海底耕耘、食害対策など、干潟資源の維持管理と持続的な利用に努めてきました。しかしながら、海水温度の上昇や集中豪雨、強大化する台風の影響などで、アサリの資源は甚大な被害を受けてしまっています。
そこで、これまでと同様に手入れと維持管理を続けるとともに、多くのアサリ稚貝が斃死する夏の間、陸上で稚貝を保護・育成し、ある程度の大きさ



徳島大学
中西先生

に育ってから干潟へ戻す取組みを始めることにしました。
その際課題となるのがエネルギーと餌の確保です。これらの課題を解決するため、大学や企業と包括事業連携を結び、地先への実装を目指す持続可能な水産業チャレンジが始まりました。